



Biscuit Conditional について（西光義弘名誉教授 追悼号）

山森，良枝

(Citation)

神戸言語学論叢, 12:131-143

(Issue Date)

2020-03-26

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012201>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012202>



Biscuit Conditionalについて*

山森 良枝

同志社大学

1. はじめに

条件文は“if p, q”の形式を持つ。条件文の表現形式は言語によって異なるが、どの言語においても、一般的に条件文では、(1) のように、前件 p が条件、後件 q がその帰結を表すという意味で、p と q の間に依存関係があることを示す。

- (1) If John comes (p), Mary will leave (q). (Standard Conditional: SC)

ところが、条件文の中には、Austin (1956) がBiscuit Conditional (BC) と呼ぶ、p と q の間に依存関係が成立しない (2) や (3)、(4) のようなものもある。(坂原 (1985) ではBCを擬似条件文 (Pseud Conditional) と呼んでいる。)

- (2) There are biscuits on the sideboard if you want them. (Austin 1956)
(3) There is beer in the fridge, if you're thirsty.
(4) Si tu veux venir, tu as le droit. (If you want to come, you have the right.) (Ducrot 1991)
(Biscuit Conditionals/ BC: 擬似条件文)

(1) をStandard conditional (SC) と呼ぶと、SCは (1') の対偶 (contraposition) に言い換えられるが、前件-後件間の依存関係を表さないBCは (2') の対偶に言い換えられないという特徴を持つ。

- (1)' Mary will not leave, if John does not come.
(2)' # There are not biscuits on the sideboard, if you do not want them.

SCとBCにはまた、BCは後件の主節が真であることを示唆するが、SCは示唆しない、という違いがある (Austin 1956)。ここでは、前件-後件間に、原因-結果などの依存関係があるSC (1) の解釈を「依存読み」、依存関係がないBC (2) - (4) の解釈を「非依存読み」と呼ぼう。

ただし、SF 等の文脈を仮定すると、(2) のBCに「聞き手の食欲/嗜好とビスケットの出現/存在との間に何らかの因果関係がある」という「依存読み」が可能になるように、どの条件文にもSCとBCに解釈される可能性があり (Austin 1956)、どちらの解釈になるのかを区別することは難しい。本論では、このようなBCの特性、ふるまいに注目して、以下の2つの問いについて考察する。

- (I) 「非依存読み」はどのようにして生じるのか。
- (II) 条件文が「依存読み」と「非依存読み」の2通りに解釈される曖昧性が生じるのはなぜか。

結論を先取りして言うと、本論の主張は以下の通りである。

- (a) BCの意味： $(p \cap q) \rightarrow r \text{ or } (p \cap (c \cap q)) \rightarrow r$ ($p+q$ の連鎖から r が示唆される)
(There are biscuits on the sideboard (q) if you want them (p). $\rightarrow$ Take biscuits (r), if you want.)
- (b) Karttunen and Peters (1979) の<結合アプローチ>と呼ばれるフレームワーク¹を仮定すると、“if p, q”において、 p が q の前提 (presupposition: ps) となる時、前提が充足され、SC読みが生じる。一方、 q の前提が p によって充足されなければ、前提が充足され、 r を得るまで $p+q$ と漸次的に投射され、BC読みが生じる。

- (a) が (I) への回答、(b) が (II) への回答である。

2. 先行研究

Biscuit conditionals に関する研究には、Austin (1956)、Ducrot (1991)に BC についての言及がある他、坂原 (1985)、Siegel (2006)、Franke (2007)、Ebert et. al. (2014)、Francez (2015) 等がある。このセクションでは坂原 (1985)、Franke (2007)、Francez (2015)を取り上げる。

2.1. 坂原 (1985)

坂原は、英語ではIf p, because q, r. は非文法的であるものの、日本語では (3) は、(If p, because q, r.と同じ構造を持つ) (6) のような意味を表すと述べ、以下の①, ②を主張する。

- (6) 喉が渴いていたら (p)、ビールが冷蔵庫に入っている (q) から、(飲んでもいいよ (r))

- ① SC では p は q を導き出す決定的要因であるのに対して、BC では、対話者間の知識のアンバランスを背景に「 p は明示されない結論 r を探し出すための指令」として機能する。

- ② BCは、一種の間接発話行為として、理由節qと条件節pさえあれば結論が導き出せるとき、理由節qが結論 r を押しのけて主節に居座る結果できたものである。

坂原の主張は、どのような文脈にBCが現れるかを理解する一助となる。しかし、pが「明示されない結論rを探し出す指令」にどのようにしてなり得るのか、また、どの条件文にも「非依存読み」と「依存読み」がなぜ可能であるのか、を説明し予測することができない。

2.2. Franke (2007)

Franke は、動的意味論を援用して、条件文の意味を、(7) のように、context set c の “if p, q” による更新 (update) として捉えられると主張する。(cはcommon ground: CG -背景/文脈-の略である。)

$$(7) c + \text{“if } p, q\text{”} = (c \cap p \cap q) \cup (c \cap \sim p)$$

Franke によれば、(7) は以下の手続きに即して解釈される： (i) p によるcのupdateの結果、仮定的文脈c+pが生じると、(ii) qがc+pにおいて評価されることになり、(iii) その結果がcに再統合される。もともと、pとqの間に (pがqの十分条件であるといった) 依存関係がないBCでは、pをcに付加することにより、cがqを適切に評価し得る文脈c+pにシフトされる。従って、BCは (common ground の要素ではない) qを最適化する談話機能を持つ、とする。このようなFranke (2007) の分析は、BCの談話機能について言及する点で評価されるべきものである。しかし、BCの語用論的な意味である (8) がなぜ推論されるのか、という問題を考えるためには、「qはc+pにおいて評価される」と言うだけでは不十分である。

$$(8) \text{ ビスケットを食べてよい } (r)$$

また、Frankeの主張は、(3) に (8) の読みと「依存読み」の両方がどうして可能になるのか、という点について予測することができないだけでなく、さらに、次のような問題もある。

条件文p→qを質量含意 (material implication) として解釈すると、pとqが相互に独立していることが前提されている場合、p→qを適切に発話することはできない。二値論理学においては、前件pが真、後件qが偽である場合を除き、条件文の真理値は全て真になるので、p→qの発話後、前提状態 (presupposition state: PS) がp ∧ qに更新されることは認められないからである。ただ、BCの後件は常に真である (Austin 1956)。これはPSがp ∧ qに更新される可能性がないことを意味しており、Frankeの「現行のPSをpによって更新 (update) する」という主張の妥当性を示唆するものである。ただ、同じ議論が日本語のBCにも当てはまるわけではない。なぜなら、日本語の4つの条件表現のうち、BCの前件には、判断のモダリティ階層での条件設定を行う「なら」が主に使用され (第5節)、真偽不定の命題がBCの前件に含

まれることになるからである。真偽不定の命題をcommon groundに付加できないことを考慮すると、「現行のPSをpによって更新 (update) する」というFrankeの主張は、少なくとも日本語のBCには当てはまらない、と考えなければならない。

2.3. Francez (2015)

Francez は、Franke (2007) を土台に (II) の問題について考察し、BCの曖昧性 (Francez ではキメラ性と言う) の要因は後件の主節にあるとする。即ち、主節qに含まれる定記述は familiarity presupposition (Heim 1982) と結びついており、文脈に応じて rigid designator または個体概念の読みを得る。前者の読みを持つ場合、pとqの間に依存関係は成立せずBCとして解釈される。一方、後者の読みを持つ場合、直接法条件節自体は特定の意味を持たず、must に対応する潜在的なモーダル・オペレータのドメインを制限するので、pとqの間に依存関係が成立し、SCとして解釈される。

ところが、(9)=(4) のBCでは、主節に含まれる定記述 “le droit (the right)” が、条件節－主節間の依存関係の有無とは無関係に常に条件節を先行詞とする “le droit de venir (the right of coming)” という解釈を持ち、個体概念を表すことはない。それにも拘らず、理論上、(9) はBCとしてもSCとしても解釈可能である。

(9) Si tu veux venir, tu as le droit. (If you want to come, you have the right.) (Ducrot 1991)

このような事実を、主節qに含まれる定記述が個体概念として解釈される場合にSC解釈が生じるとする Francez (2015) の分析は説明することができない。言い換えれば、BCの「依存読み」は、qに含まれる定記述が個体概念を表すことによって引き起こされる読みではない、ということである。

2.4. まとめ

以上から、“if p, q”の前件と後件が互いに独立した関係にあるBCにおいては、qを結論と見なすことは難しい。(2) や (9) の (語用論的な) 意味は (10a, b) のrにあり、rを考慮した分析が必要になる。

- (10) a. There are biscuits on the sideboard if you want them. → Take biscuits if you want. (r)
b. If you want to come, you have the right. → You may come if you want. (r)

ただし、rはBCから生じる含意 (implicature) であり、明示的に与えられているわけではない。次のセクションでは、rがp+qの連鎖を前提に生じると考えられることを示そう。

3. SC/BCにおける前提の投射問題

Stalnaker (1974)、Karttunen (1974) では、前提は、(11) が示すように、当該の言語表現が適切に発話/解釈されるために必要な文脈への要求として捉えられている。(ps: presupposition)

(11) B is a ps of S iff S can be felicitously uttered only in contexts that entail B. (Kadmon 2001:119)

“if p, q”の形式を持つ直接法条件文では、qの前提は条件節のpに含まれている。しかし、“if p, q”の前件と後件が互いに独立した関係にあるBCにおいては、pはqの前提を提供しない。そこで、冒頭の (3) (以下に再録) では、(12a-d) が示すように、pとqのどちらもrの前提になることができる点に着目すると、BCが表す語用論的意味rは $p+q$ を前提に生じると考えられる。

(3) There is beer in the fridge (q) , if you're thirsty (p) . $\rightarrow$ you may drink beer (r) .

- (12) a. If you are thirsty, you may drink beer. $(p \rightarrow r)$
 b. If there is beer in the fridge, you may drink it. $(q \rightarrow r)$
 c. You are thirsty or there is beer in the fridge. $(p \cup q)$
 d. Either way, you may drink it. (r)

前提の投射に関するKarttunen and Peters (1979) スタイルの結合アプローチを仮定した場合、(12a-d) の流れを次のように記述することができる²。

(13) $(p \cap q) \rightarrow r$ or $(p \cap (c \cap q)) \rightarrow r$

(13) は、pとqの連言からrが示唆される、あるいは、rは $p+q$ (もしくは $p+(c+q)$) という前提を持つことを示している。つまり、p とq の間に依存関係が成立しないBCでは、qの前提がpによって充たされないので、pがそのままqに投射され、rが得られた時点、即ち、rの前提が $(p+q)$ によって充たされた時点で、投射が完結し、BCの解釈としてrを得ることになる。他方、“if p, q”の前件と後件が依存関係にあるSCでは、qの前提がpによって充たされているので、pのqへの投射は生じない。

以上のように、左から右へと漸次的に前提が投射されるKarttunen and Peters (1979) スタイルの単純な投射モデルを仮定すると、BCの語用論的意味がどのように生じ、また、“if p, q”の形式に、BCの「非依存読み」とSCの「依存読み」の2つの読みがどのようにして生じるのかという問題を前提の投射という視点から統一的に捉えることができるようになる。

しかし、BCにおいて、 $(p+q)/(p+(c+q))$ のように文の左から右へ前提の漸次的投射を引き起こす要因は何だろう。この問題について考える出発点として、次節では、BCの語用論的意味である r とunconditional presuppositionを対比することから始めよう。

4. 前提と発話文脈

適切な文脈は文が適切に発話され使用されるための基礎的条件である。従って、“if p , q ”の発話文脈がBC, SC の解釈の導出に与える影響がどのようなものかは重要な問題である。このような観点から、このセクションでは、BCの語用論的意味である r とunconditional presuppositionを対比して、 $(p+q)/(p+(c+q))$ の前提投射が生起する文脈の特性を明らかにするための下準備を行うことにする。そのためにまず、van Rooij (2007) のunconditional presuppositionに関する分析を見てみよう。

4.1. Unconditional presupposition

Karttunen & Peters (1979) スタイルの前提の結合アプローチを仮定すると、(14a) は (14b) のような前提を持つことが予測される。しかし、実際には、(14b) ではなく、主節の条件的前提が強化されたunconditional presuppositionと呼ばれる (14c) が前提として理解される。この点をvan Rooij (2007) の主張に従ってもう少し明確にしてみよう。

- (14) a. If the bottle is empty, then [John]_F drinks too.
 b. If the bottle is empty, there is someone other than John who drinks.
 c. There is someone other than John who drinks.

van Rooij (2007) は、unconditional presuppositionを、条件節と主節の独立性の問題に還元される現象として説明しようとする。まず、“ $p \rightarrow q$ ”において p と $\neg q$ が同時に真であると考えことは標準的な独立性の概念と矛盾する。そこで、Lewis (1975) に基づいて、 p と q がある文脈において相互に独立していると言えるのは、 p の真偽とは無関係に q と $\neg q$ が可能であり、同時に、 q の真偽とは無関係に p と $\neg p$ も可能な場合である、という「弱い独立性」の概念³を導入して、以下のように考えたのである。

“ $p \rightarrow q$ ”の条件文を質量含意として解釈すると、 p と q が相互に独立していることが前提されている場合、 $p \rightarrow q$ は不適切な発話になる。 $(p \wedge \neg q)$ の場合を除き、条件文は真であるが)、 $p \rightarrow q$ の発話によって、前提状態 (presupposition state: PS) が $p \wedge \neg q$ に更新される可能性が生じるからである。しかし、“ $p \rightarrow q_\chi$ ”の q が χ を前提として持つ場合、Karttunen and Peters (1979) スタイルの結合アプローチに従えば、 q の前提は χ になるので、“ $p \rightarrow \chi$ ”という前提を持つことになる。ここで、文脈 σ において、 p と χ が互いに独立していることが前提されていると仮定すると、

$[p \wedge \neg \chi](\sigma) = \emptyset$ は偽である。ただし、 $'p \rightarrow q_{\chi}'$ が適切に作られているとすれば、 σ において、「 p は可能である」が真であることになり、さらに、「 χ は必然である」も真であることになる。これは χ が前提されているということを意味している。従って、話者が $\neg p$ と χ を前提として持つ場合、つまり、条件節 p と主節 q が無関係であることが前提されている場合に χ が強化されるということになる。また、以上の議論に基づいて、van Rooij は、最も自然なデフォルト・ルールは、 $\Box \chi \rightarrow \Diamond K(a, \chi)$ 、即ち、「話者が χ を前提として持つとき、話者以外のエージェント a も χ と整合的な前提を持つ」であり、unconditional presuppositionが生じるためには、 χ が σ において予め前提されていなければならない、と述べている。

van Rooijの議論を支持するためには、条件節と主節が無関係ではないと判断される場合には unconditional presuppositionが生じない事例を見つけなければならないが、文化や文脈から条件節と主節が無関係ではないと判断される (15a) の前提は (15b) であり、unconditional presuppositionは生じない。

- (15) a. If Jane takes a bath, Bill will be annoyed that there is no more hot water.
b. If Jane takes a bath, there will be no more hot water. (Beaver 1995)

このことをBeaver (1995) の言葉で言えば、我々は p と q が独立しているとも独立していないとも考えることができるが、独立していると考えた方がより適切である場合に、unconditional presuppositionが生じる、ということである。

では、以上を頭に置いて、BCの語用論的意味である r と unconditional presuppositionが生じる環境を比べてみよう。

4.2. 前提強化とBC

van Rooijの分析によると、“ $p \rightarrow q_{\chi}$ ”の q が χ を前提として持つ文では、 p と q が相互に独立し、かつ、 χ が当該文脈において前提されている場合に、 χ が強化され、unconditional presuppositionが生じるのであった。“if p, q ”に生起する非依存読みも、 p と q が互いに独立している環境で生起する点では同じである。

ただ、unconditional presupposition自体は、非明示的な要素であるものの、unconditional presuppositionが生じるためには、発話時以前の段階で、unconditional presuppositionが話者と話者以外のエージェントの共有知識として文脈に含まれていなければならなかった。一方、BCの非依存読み r も、非明示的な要素である点では unconditional presuppositionと共通するが、発話時以前の段階で話者と話者以外のエージェントの共有知識として文脈に含まれているわけではない。それでも、BCにおいて r が生じるためには、前提強化のメカニズムに則して、 r の前提である p と q が話者と話者以外のエージェントの共有知識として文脈に予め含

まれていなければならない、ということになるのだろうか。次のセクションでは、日本語に存在する4つの条件表現の異同から、この点を明確にしよう。

5. 日本語の条件表現

英語では、BCもSCも同じ“if p, q”の形式をとる。これに対して、日本語では「なら、たら、ば、と」の4つの条件表現を主要部とする4種類の直説法条件節があり、これらは、BCに関するふるまいの違いから、「なら」と「たら、ば、と」の2つのクラスに大別される。このセクションでは、日本語の記述文法で明らかにされてきた事実から、個々の条件表現の意味特性とそれらが (SCおよびBCとして) 生起する文脈特性を特定し、BCの解釈を生じる文脈上の制約を明らかにする。

5.1. 「なら」vs. 「ば、たら、と」

先述した通り、日本語の条件表現は「なら」と「ば、たら、と」の2つのクラスに大別される。しかし、(16) のように、文脈から独立した環境では、どの条件表現も使用することができる。(16) はどの例も (17a-d) の対偶に言い替えることができ、前件と後件の間に依存関係があるSCの解釈を持つことが確認できる。

- (16) a. 明日、雨が降らなければ、外で食べる
 b. 明日、雨が降らなかったら、外で食べる
 c. 明日、雨が降らないと、外で食べる
 d. 明日、雨が降らない (の) なら、外で食べる
- (17) a. 明日、雨が降れば、外で食べない
 b. 明日、雨が降ったら、外で食べない
 c. 明日、雨が降ると、外で食べない
 d. 明日、雨が降る (の) なら、外で食べない

しかし、次の (18) では「なら」以外の条件表現は使えない。(18d) 以外は容認されない文である。

- (18) a. *バルセロナに行けば、いいレストランを知っているよ
 b. *バルセロナに行ったら、いいレストランを知っているよ
 c. *バルセロナに行くと、いいレストランを知っているよ
 d. バルセロナに行く (の) なら、いいレストランを知っているよ

(18) はどの例も、(19) の対偶に言い替えることができないので、BCであることが分かる。

- (19) a. #バルセロナに行かなければ、いいレストランを知らないよ
b. #.バルセロナに行かなかったら、いいレストランを知らないよ
c. # バルセロナに行かないと、いいレストランを知らないよ.
d. # バルセロナに行かない (の) なら、いいレストランを知らないよ

従って、基本的に、「なら」だけがBCと共起可能な条件表現である。

益岡 (1997) によれば、BCと共起できない「ば、たら、と」が、前件と後件の間の「論理的、時間的、一般的」な依存関係を示す形式であるのに対して、BCと共起可能な「なら」は「話者の判断」を示す形式として特徴づけられる、と述べている。

- (20) a. -ば : 中核命題階層での条件設定 「時間があれば、行く」
b. -たら : 時空間階層での条件設定 「授業が終わったら、事務室に来てください」
c. -と : 一般的関係 「春になると、花が咲く」
d. -なら : 判断のモダリティ階層での条件設定 「あなたが発表するなら、私もする」

4つの条件表現のうち、原則的に「なら」だけがBCに生起するが、益岡が指摘するように、「なら」は4つの条件表現で唯一モーダルな意味を表し、真偽が未定の命題と共起する。このことから、少なくとも日本語のBCでは、条件節命題が話者と話者以外のエージェントに共有されない、即ち、当該文脈に含まれていない情報であることは確かなようである。そこで、仮説として、BCの非依存読みが生じる文脈条件を次のように述べることができるだろう。

- (21) BCは、その前件命題が、common groundもしくは発話文脈の要素として登録されていない環境で生起する。

第4節で触れたように、unconditional presuppositionが話者と話者以外のエージェントの共有知識として当該文脈に含まれている環境で生起するのに対し、BCの前件命題は、当該文脈に含まれない、対話参与者間の非共有情報であることが、必要な文脈条件なのである。

5.2. BCの「たら」節

ただし、「たら」節の主動詞が、(22a, b) のように移動動詞や動作動詞の場合、BCの解釈は生じないが、(23a, b) のように、「渴く」のような状態変化動詞や「渴いて」のようなテ形、さらには、「行きたい」のような状態動詞の場合には、BCの解釈が生じるようになる。

- (22) a.* バルセロナに行ったら、いいレストランを知っているよ
 b.* バルセロナで泊まったら、いいレストランを知っているよ
- (23) a. 喉が渴い (てい) たら、冷蔵庫にビールがあるよ
 b. バルセロナに行きたかったら、来年、学会があるよ

Tonhauser (2015) によると、英語の状態変化動詞とアスペクト形式は、発話が適切に理解されるために必要な前提がcommon groundに含まれない環境で生起するとき、「後悔する」のような叙実動詞や‘stop’のように、それらの形式が慣習的含意として持つ前提情報を加えてcommon groundを更新する談話調整 (accommodation) 機能を持つと言う。

日本語の状態変化動詞やアスペクト形式にも同様の機能があると考え、**「たら」節の主動詞が状態変化動詞やアスペクト形式を取る動詞のとき、BCの解釈が生じるという事実**は、「たら」節命題またはその前提となる情報が、common groundに未登録であるような環境で使用されている場合にBCの解釈が生じることを示唆していると言えるだろう。

そして、「たら」節がBCの解釈を持つもう1つの例は、(23b) のように主動詞に願望を表す接尾辞の「たい」が付加されている場合である。「たい」の主体は一人称であるので、(23b) のように「たい」の主体が聴者であるとき、「たら」節命題が表す情報はcommon groundの要素ではないと考えられる。

以上は、(21) の仮説の妥当性を示唆すると同時に、別の見方をすれば、BCの条件節は、common groundにない情報を発話文脈に新たに導入するための装置であることを示唆している、と述べることができるだろう。それでは、BCの結果節はどのようなタイプの情報を表しているのか、この点について見ることにしよう。

5.3. 結果節と終助詞 (よ vs. ね)

日本語の終助詞は、discourse particleとも呼ばれるように、それが付加される文や発話の情報がどのようなタイプのものであるかを示す機能を持つ。このような観点からの古典的研究として知られる神尾 (1990) は、「よ」と「ね」の談話機能にいて次のように述べている。

- (24) a. -よ : 話者に属する情報に付加される
 b. -ね : 話者・聴者に属する情報に付加される (神尾 1990)

(24) に従って、「話者情報」「話者・聴者情報 (=共有情報)」という用語を用いると、A-B間の知識のアンバランスを背景に、BがAに話者情報を提供する (25b) では「よ」が使える、「ね」は使えない。逆に、知識のアンバランスが解消され、共有情報となった情報をAがBに提示する (25c) では「ね」が使える、「よ」は使えない。

- (25) a. A: あれは何ですか?
b. B: あれは病院です{よ/*ね}
c. A: 大きい病院です{*よ/ね}

このような「よ」と「ね」の差異を頭に置いて、BC、SCにおける「よ」と「ね」の分布状況を見てみると、BCに付加できるのは、「よ」だけである。

- (18)' d. バルセロナに行く (の) なら、いいレストランを知っている{よ/*ね}.

一方、SCでは、(26a-d) の通り、「よ」と「ね」のどちらを付加してもよい。

- (26) a. 大阪を8時に出れば、東京に11時に着きます{よ/ね}
b. 大阪を8時に出たら、東京に11時に着きます{よ/ね}
c. 大阪を8時に出ると、東京に11時に着きます{よ/ね}
d. 大阪を8時に出る (の) なら、東京に11時に着きます{よ/ね}

以上のことは、BCでは前件の条件節だけでなく後件の結果節も、common groundにない情報であることを示している。

6. 考察

本稿では、“if p, q”の前件と後件が互いに独立した関係にあるBCではqを結論と見なすことは難しく、「お腹がすいていたら、サイドボードにビスケットがあるよ」の(語用論的な)意味は「ビスケットを食べてよい」(r)であるとの観点から、このような「非依存読み」がどのようにして生じるのか、また、「非依存読み」と同時に「依存読み」も可能な解釈の曖昧性がなぜ生じるのか、を解明することを通して、BCを生成する文脈上の制約とストラテジーを明らかにした。“if p, q”のpとqの間に依存関係がないBCでは、qの前提がpによって充たされないので、pがそのままqに投射され、rが得られた時点で、即ち、rの前提が (p+q) によって充たされた時点で、投射が完結し、rを得る。他方、“if p, q”の

前件と後件が依存関係にあるSCでは、 q の前提が p によって充たされているので、 p の q への投射は生じず、SCとして完結する、ということを示した。

BCでは、文の左から右へ、 $(p+q)$ と前提が漸次的に投射される。その要因を探るために、上記のような前提投射が生起する文脈環境の特徴として、前件に含まれる命題 p やその前提となるべき情報がcommon groundに含まれない、対話参与者間の非共有情報であることを示した。後件に含まれる命題 q も対話参与者間の非共有情報である。これは、BCの前件と後件が互いに独立した関係にあるだけでなく、どちらもcommon groundにない情報であるという文脈上の特徴が、 $(p+q)$ という投射の流れを引き起こす上で決定的な役割を果たしている、ということを明らかにしたことになる。

本稿の考察によって明らかになったもう1つの興味深い点は、前件と後件の独立性とそれらがcommon groundに含まれない情報を含むという文脈上の特徴が、メタ意味論的見地から見ると、<発話文脈とは異なる新たな文脈の創出/導入>という情報処理上の戦略として捉え直すことができることである。ある文や発話が聴者に適切に理解されるためには「適切な文脈」が不可欠である、という一次元的な解釈枠組みの重要性がこれまで自明視されてきた。しかし他方で、「適切な文脈」がない場合に行う「談話調整」(accommodation)については、「後悔する」のような叙実動詞や‘stop’などから示唆される明確な含意が記述され分析されてきたにすぎない。前件と後件の独立性とcommon groundにないというBC固有の情報構造や文脈の特性を、common groundとは別に新たな解釈枠組みを創出するための言語戦略として記述し分析したものは、管見の限り、あまりないように思われる。異なる言語でも同じことが言えるのかどうかなど、残された問題は今後の課題である。

註

* 本稿の一部は、2018年に開催されたWorkshop on Ambiguity: Perspectives on representation and solution (30th European Summer School in Logic, Language and Information) および、第35回日本認知科学会で発表されたものである。発表に対して貴重なコメントをいただいた松井理直、蔵藤健雄の両氏に感謝する。

¹ Karttunen & Peters (1979) では、“ p and q ”と“ $\text{If } p \text{ then } q$ ”は同じ次のようなルールを持つ。

(i) $ps(p \wedge q) = (ps(p) \wedge (p \rightarrow ps(q)))$

(i) は、“ p and q ”と“ $\text{If } p \text{ then } q$ ”の p が発話されると、 p が q のlocal context になることを示している。

² (13) $(p \cap (c \cap q)) \rightarrow r$ は、動的意味論に従って、現行のcommon ground c を新たな命題情報によって更新 (update) する効果があると仮定したものである。ただし、真偽の定まらない命題はcommon groundに付加できないため、(13) では、common ground c には、真偽不定のBCの前件命題 p ではなく、後件命題 q だけを付加している。(蔵藤健雄氏のご指摘による (P.C.))

³ van Rooij (2007:296) によれば「弱い独立性」の概念は以下のように規定される。

Lemma 4.3 (independence) : Formulae ϕ and ψ are independent of each other in context σ iff the following four conditions are satisfied (where $\Diamond\phi$ means that $[\phi](\sigma) \neq \emptyset$)

(i) If $\Diamond\phi$ and $\Diamond\psi$, then $\Diamond(\phi \wedge \psi)$, and

- (ii) If $\Diamond\phi$ and $\Diamond\neg\psi$, then $\Diamond(\phi\wedge\neg\psi)$, and
- (iii) If $\Diamond\neg\phi$ and $\Diamond\psi$, then $\Diamond(\neg\phi\wedge\psi)$, and
- (iv) If $\Diamond\neg\phi$ and $\Diamond\neg\psi$, then $\Diamond(\neg\phi\wedge\neg\psi)$.

参考文献

- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論-言語の機能的分析』 東京：大修館書店.
- 益岡隆志. 1997. 『複文』 東京：くろしお出版.
- 坂原 茂. 1985. 『日常言語の推論』 東京：東京大学出版会.
- Austin, John L. 1956. Ifs and cans. *Proceedings of the British Academy* XLII, 107-132.
- Beaver, David. 1995. Presupposition and Assertion in Dynamic Semantics. *Ph.D. thesis*, CCS. Edinburgh, UK.
- Ducrot, Oswald. 1991. *Dire et ne pas dire*. Hermann, Paris.
- Ebert, Christian, Cornelia Ebert and Stefan Hinterwimmer. 2014. A unified analysis of conditionals as topics. *Linguistics and Philosophy* 37 (5). 353-408.
- Francez, Itamar. 2015. Chimerical conditionals. *Semantics & Pragmatics* 8-2. 1-35.
- Franke, Michael. 2007. The pragmatics of biscuit conditionals. *16th Amsterdam colloquium*, 91-96.
- Heim, Irene. 1982. *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. Garland, New York.
- Kadmon, Nirit. 2001. *Formal Pragmatics*. Blackwell Publishers. Malden, MA.
- Karttunen, Laurie. 1974. Presupposition and linguistic context. *Theoretical Linguistics* 1. 181-194.
- Karttunen, Laurie and Stanley Peters. 1979. Conventional implicature. C.K.Oh and D. Dinneen (eds.) *Syntax and Semantics, Presupposition*. Vol. 11, 1-56. Academic Press. New York.
- Lewis, David. 1975. Adverbs of quantification. E.L Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*. 3-15. Cambridge University Press. Cambridge, MA.
- van Rooij, Robert. 2007. Strengthening conditional presuppositions. *Journal of Semantics* 24 (3). 289-304.
- Siegel, Marl. 2006. Biscuit conditionals: Quantification over potential literal acts. *Linguistics and Philosophy* 29 (2), 167-203.
- Stalnaker, Robert. 1974. Pragmatic Presuppositions. Milton K. Munitz and Peter K. Unger (eds.) *Semantics and Philosophy*, New York University Press, New York.
- Tonhauser, Judith. 2015. Are ‘informative presuppositions’ presuppositions? *Language and Linguistics Compass* 9/2. 77-101.